

令和元年6月12日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02313

研究課題名(和文) 地域文化における絵画の役割 - 絵金作 芝居絵屏風が土佐の祭礼に享受された根拠の証明

研究課題名(英文) role of painting in local culture - the painter kinzo and shibai-e screens in tosa

研究代表者

松島 朝秀 (matsushima, tomohide)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授

研究者番号：60533594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：大衆芸術である絵金の「絵画」を、単なる日本近代絵画の一例としてではなく、美術的評価と地域社会における役割を一度切り離して研究し、再び重ね合わせて考察しなければ理解できないと考えた。芝居絵屏風の役割について検証するとき、神社祭礼の歴史を改めて考察すると、明治期の神社合祀によって、祭儀の画一化とともに民衆と結びついた土着の信仰形態が大きく解体した歴史がある。しかし、幕末明治に登場した、異端又は反体制的と言われた絵金の芝居絵屏風を用いた土佐の祭礼は、明治以降、近代化されていく社会に抵抗する土佐民衆の思いが、信仰の場である神社を通して形として表れたものであると考察できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、絵画作品の色材や支持体を特定する科学的調査と、作品を用いる祭礼の歴史や状況の民俗学的調査を合わせ、文化継承の原動を学際的に研究する研究手法に特色がある。絵画の物質的・表現的特性の見地から現象としての祭礼を研究し、絵画の役割を解き明かす研究である。異端又は反体制的と言われた絵金の芝居絵屏風を用いた土佐の祭礼が、明治以降、世相に影響され新たな芸術を受け入れ伝承して来た理由とすれば、「大衆の文化創造」の原動に及ぶ研究結果が得られると予想する。この結果は、日本の近代史を地方から再認識することにつながり、新たな日本大衆芸術の理解に新たに貢献すると考える。

研究成果の概要(英文)：We thought that it would be impossible to understand Ekin's "painting", a popular art, not merely as an example of modern Japanese painting, but by studying the artistic evaluation and the role in the community once in isolation. When examining the role of Shibai-e, considering the history of Shinto shrine festivals again, there is a history of largely dismantling the form of indigenous religion connected with the people along with the unification of the ceremonies by the merger of Shinto shrines of the Meiji era. However, the festival of Tosa using ekin's Shibai-e said to be heresy or anti-system, which appeared at the end of the Edo period, is a place of faith where the thoughts of Tosa people resisting the modernization society since the Meiji era. It can be thought that it is something that appeared as a form through the shrine.

研究分野：文化財学

キーワード：絵金 芝居絵屏風 土佐 神社祭礼 民衆 科学的分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

絵画と地域文化に関する研究においては、滋賀県の大津絵の例が周知されている。しかし、地方独特の大衆絵画とは、人々の往来が盛んな地方の名産物として生まれた経緯が一般的であり、神社祭礼の一部として広く用いられた絵金の芝居絵屏風は特異な例である。何故祭礼に用いたのか根拠を突き止めようとすると、在地祭礼の変化についても検証しなければならない。本研究によって、絵画を活用する特異な在地祭礼の変遷を追うことは、日本の地方文化の変容を示す指標の一つを検証することに直結し、人文学研究として重要であると考えた。

高知県で幕末から明治期にかけて制作活動を行ってきた絵金(弘瀬洞意)の芝居絵屏風は、歌舞伎芝居の各題目から選んだ一場面を、過激で過剰な表現と原色の赤、青、緑を基本とした非常に激しい色使いが作風である。しかし、この作風に至ったのか経緯は伝承されていないが、高知では毎年の神社祭礼に展示され民衆から親しまれてきた。絵金の芝居絵屏風は、高知の地域性、文化史を語る上で重要な役割を持っている。近年、絵金作品の他研究者による調査例としては、平成15年に朽津信明氏が行った二点の絵馬が科学調査されたのみである。この研究では、絵馬に使用された青色顔料は舶来した人工顔料の可能性が高いと結果が示された。

申請者は、23年度から絵金作の芝居絵屏風16点の色材の科学調査を行った。その結果、同じ画面に人工顔料と天然顔料の使い分けが見出された。この使い分けは、単なる天然顔料の代替品として人工顔料が用いられているとは考えにくく、制作者の表現目的によって選択されたと推測された。さらに、得られた結果を検証する過程で、絵金の特色とされていた彩色感と構図は、単に発色の良し悪しといった顔料の物性だけに依存したのではなく、芝居絵屏風が活用される祭礼と地域の民俗性から大きな影響を受けているのではないかと推論を立てた。

本研究は、この推論を基に絵画と祭礼の関係を通して土佐独特の大衆文化に着目するものだが、この絵金作の芝居絵屏風の独特性を検証することは、高知の民俗性を再検証する事のみならず、「土着と新しい芸術が融合した理由と過程の検証」になり、日本の地方文化の新たな発見や理解、また地域の文化継承の活性化に貢献できると考え着想した。

2. 研究の目的

本研究は、「絵金」と呼ばれた絵師(弘瀬洞意)の芝居絵屏風が、大衆に受け入れられ土佐の神社祭礼に享受されてきた根拠を証明し、新たな地域の文化理解とさらなる活性化を促すことを目的とする。幕末明治にかけて制作された絵金の芝居絵屏風は、あまりにも猥雑、土俗的で血みどろな作風であるため、日本美術史において異端であるとされてきた。しかし、何故このような絵画が大衆文化を象徴する祭礼に必要であったのか？何故そのような作風となったのか？これまで誰も触れることが無かった疑問に、初めて学際的な視点で挑む。

芝居絵屏風の絵画的性質を科学調査で検証した結果と、祭礼の様式的性質を民俗学見地から検証した結果を合わせ、絵画が祭礼に取り組みされた原動を新たな視点で解明する。

3. 研究の方法

本研究は、「芝居絵屏風が民衆に享受された根拠と、祭礼の場で果たす役割を検証する」ことを目的とし、祭礼と芝居絵屏風の悉皆調査を行い活用状況や保存環境の記録。芝居絵屏風の色材や支持体の科学調査及び制作技法の検証。芝居絵屏風の特色である彩色感の解明、祭礼に享受された根拠の証明。以上の研究内容を実施する。この調査は、研究拠点となる高知大学のある高知県域を中心に、地域の民俗史・美術史を専門とする博物館施設や所属の学芸員と協働で遂行する。また、他地方の祭礼形式にも留意し、本研究の日本文化における位置づけを常に概観する。

この検証は、近代絵画史、近代絵画材料史に精通した研究者(研究分担者)、近世日本画を研究している日本画家(研究分担者)と協働する。この結果を検討し総括する。

4. 研究成果

高知県内の祭礼の調査

神社祭礼は地域の民俗芸能に密接に関わってくる。高知県内の民俗芸能を季節から見ると夏の盆の時期と、秋の祭りの時期に集中する。盆時期には盆踊り、秋時期には花取り踊り(太刀・鎌・手拭・ナ長刀を採物としている)について、こおどり(鉦、締太鼓、団扇、扇子を採物としている。念仏ではなく小歌を歌って踊る)と神楽とが盛んである。初春の季節は弓祭りや百手が目立つ。理由は弓射が悪魔払いの信仰を基盤にしているからである。獅子舞も悪魔払いの信仰をもつ故に、新春に行なわれることが多い。花取り踊りは、盆の季節から秋の神祭にかけて県下各地で踊られる。

これらの芸能奉納時期と地域をまとめた結果、高知では芸能が家や個の祭りの時期よりも、村や集落の安全祈願と大きく関わっていることが改めて確認できた。

以上の調査より、主な民俗芸能奉納時期・地域と、現在の芝居絵屏風を奉納する祭礼行事を比較すると、地域が明確に分かれていることが分かった。

民俗芸能調査を進めその輪郭が見えてくると、高知県に接する徳島県、愛媛県、香川県の比較が次の課題になってきた。四国山地を越えて、他県の祭りや民俗芸能を調査していくうちに、その風土

性の異なりに気づいた。他県では、花取り踊りやこおどりは神祭で踊るよりも盆や雨乞いに踊ることが多い。これらを殊に雨乞い踊りと呼称している地域も少ないほどである。例を挙げれば、徳島県祖谷の神代踊りも古くは雨乞い踊りと呼称していたことが知られている。

現在、愛媛県、徳島県、香川県の3県は、高知県の土佐郡土佐町早明浦ダムの貯水に水資源を完全に頼っている。この3県はその自然環境によって歴史的に水不足に悩まされてきた。よって、夏も冬も枯れた水資源に悲嘆し神仏に頼んで降雨を願う、すなわち盆に踊られる念仏踊りは盆時期には必ず、また合わせて雨乞いのために踊る機会も多い。

一方、土佐側は太平洋の海風をうけて多雨地帯であるため、盆時期に雨乞いのため踊るといふ芸能は育たなかった。雨乞い踊りの記録が少ないことが裏付けになる。この実態は、土佐において盆の芸能が盛んでないことを示す一因だと考える。

神社で芝居絵屏風を奉納する祭礼の時期は6月下旬から8月上旬であり、主には7月である。夏期の祭礼に、盆踊りや雨乞い踊りなどの賑やかな芸能奉納ではなく、芝居絵屏風を奉納する静かな祭礼が行なわれる理由は、上記で示した背景が関係しているのではないかと考える。

また、土佐の近代史にみると、江戸時代初期には土佐藩家老の野中兼山によって庶民の一揆を恐れ踊り制禁が布かれた史実があり、上記した理由に合わせればより背景が明確になると考える。

四国の主な自然災害

芝居絵屏風の奉納がはじまったとされる時期以前の災害について調査した。災害は祭礼行事に密接に関係することが理由である。江戸期以前と江戸期を合わせて、主に水災害に関係する災害件数を求めた。比較として高知県以外の3県も合わせて調査した。

調査の結果、高知県における洪水災害件数が他県と比較して顕著に低いことが分かった。この結果は、上記の盆に関わる芸能奉納が高知県では盛んではない理由に関係すると考える。

他県よりも件数が多い地震・津波、土砂災害は、高知県の人口密集地が沿岸及び山岳であり記録数が多いことが要因だと考えられる。一般的に自然災害が多いと認識されてきた高知県は、他県よりも発生件数が低いことが確認できた。

本研究は、現在も上記の調査結果をより詳細にまとめ、江戸時代後期の社会状況と照らし合わせた結果と考察を進めている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

郡頭神社の絵金と協働教育 高知大学教育実践研究 (野角孝一,中村るい,松島朝秀,吉岡一洋,中谷有里) 32/69, 76 2018 (大学・研究所等紀要) 査読無し

〔学会発表〕(計2件)

松島朝秀,金城正紀,野角孝一:地域文化における絵画の役割 - 土佐・芝居絵屏風の祭礼空間における機能と表象に関する研究 - (文化財保存修復学会第40回大会,高知 2018)

松島朝秀,野角孝一:芝居絵屏風における色材分析と彩色の想定復元 (文化財保存修復学会第39回大会,石川 2017)

〔図書〕(計1件)

地域の絆 - 芝居絵屏風 - 郡頭神社棒打絵馬保存会収蔵を中心として (編集協力:松島朝秀) (2018) 出版社:株式会社リーブル ISBN:978-4-86338-212-1

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：野角 孝一

ローマ字氏名：Nozumi Koichi

所属研究機関名：高知大学

部局名：教育研究部人文社会科学系教育学部門

職名：講師

研究者番号（8桁）：50611084

研究分担者氏名：荒井 経

ローマ字氏名：Arai Kei

所属研究機関名：東京藝術大学

部局名：大学院美術研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：60361739

研究分担者氏名：高林 弘実

ローマ字氏名：Takabayashi Hiromi

所属研究機関名：京都市立芸術大学

部局名：美術学部 / 美術研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：70443900

(2)研究協力者

研究協力者氏名：金城正紀

ローマ字氏名：Kinjo Masanori

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。